

「土木の魅力」をもっと伝えよう！ ～担い手確保に本気の取り組みを～



梶木洋子
論説委員
(株)エイト日本技術開発
国土インフラ事業部
技師長

土木の担い手確保と技術の継承が大きな課題となっている。これは、少子高齢化の影響による労働人口そのものが減っていることに加え、土木を積極的に目指す学生が減少していることが大きな要因であろう。これから就業しようとする、またはこれから進路を決めようとする学生にとって、他の職業に比べて魅力がない、きつい仕事の割に収入が少ないなどが敬遠される理由のようである。

かつて、建設コンサルタントに勤務する方から、自分の子供にはこれほど厳しい職業には就いてほしくないとの話を聞いたことがある。また、建設会社勤務の人が自分の子供にお父さんと同じ会社に入りたいと言われたときに、この仕事の明るい未来が思い描けないからと反対したそうである。安全で豊かな暮らしを支えているのは土木であり、今も将来も社会になくってはならない職業であり、土木技術者は誇りを持って土木に従事していると信じていた自分にとっては大変衝撃的な話であった。

土木の広報活動の一環として今年の7月8日に土木学会の本部がある土木会館にて、外部の方に土木学会と土木を知って頂く目的で、「オープンキャンパス土木学会2017(写真1,2参照)」が開催された。これは、コンサルタント委員会で10年間継続している体験型の「土木ふれあいフェスタ」を中心に、土木コレクションやドボ博、どぼくカフェ、映画上映、七夕まつりなど全館を使って小さな子供から大人まで、土木を見て、知って、楽しんで頂くという催しである。土木関係者のご家族や学生、近隣にお住まいの方など通りがかりの方も含め、土曜日の日中5時間で大人131名、子供86名が来場し、土木に関する様々な体験を満喫していただいた。

子供たちからは、大人には考え付かないような興味深い質問が投げかけられた。三角形のトンネルは弱いのに、なぜ三角の橋は強くなるのかと問う小学生。橋を通るときに、いろいろな橋があることに気がつき、なぜこの形をしているのかと考えるようになったという中学生。子供たちは「土木」を知らなくてもあらゆることに興味を抱き、さらに詳しく知りたいという好奇心を見せる。物の形には意味があること、また、自然災害がなぜ起きるかなど、そのメカニズムを模型で説明すると、目を大きく開いて明るく生き生きとした表情を見せる。周りの大人たちが少しだけ道筋を見

せて手助けをしてあげれば、自分が面白いと思った方向に進んで行く。

自らが誇りを持って社会的な役割を担う仕事に従事すること、それは時に厳しいけれど、実は楽しく生きがいのある仕事であることを自らが見せることで、後ろに続く人が増えてくるのではないかと思う。楽しく仕事をしている親、先生、上司は、子供、学生、部下を育てることができると信じたい。

担い手が少ないと嘆く組織のトップも考え方を転換する必要がある。「ワークライフバランス」、「女性活躍」などの言葉が一人歩きをしているが、実態は長時間労働から脱却できず、有給休暇や育児休暇の取得もまだ不十分である。さらに、仕事と家庭の両立を女性の問題ととらえている間は、安心して子供を育てられる環境には程遠く、少子化は深刻化する一方であろう。仕事も家事も育児も家族のみならず組織や社会全体で支え担う仕組みがあってこそ、初めてあらゆる人々がはつらつと働ける社会に近づくことができるのである。

担い手の確保と後継者育成は、あらゆる手立てを講じて長期的な視点で取り組まなければならない課題である。ないないづくしを嘆くだけでなく、その仕組みの構築に向けて、まずは、一人一人が原点に立ち返って、その生きる姿勢を後進に見せることから始めなければならないと思う。



写真-1 案内リーフレット



写真-2 トラスの模型実験